

特定非営利活動法人 CAP センター・JAPAN



理事長
側垣 一也

大阪府

アメリカで開発された、子どもへの暴力防止プログラム（CAP）を普及する日本の団体として認可を受けた同会は、これまで20年に亘り、子どものいじめ、大人からの虐待・体罰・誘拐・痴漢・性暴力を含めた様々な暴力から、子ども自身が自分の心とからだを守るための知識とスキルを、大人も含め、提供する暴力防止プログラムの推進を行っている。また平行して、養成講座を全国で開催し、多くのスペシャリストを育成している。日本では子どもの暴力に、学校以外の組織が介入することがほばない中、現在全国に140の実践グループが存在する中、32都道府県でのCAPグループ設立とプログラム提供活動に寄与し、これまで539万人以上の大人と子どもがプログラムに参加した。子どものころに受ける虐待やいじめ、ネグレクトは、人格形成に大きな影響を及ぼし、一生トラウマを抱えたり、心の病や自死、他者への暴力に向わせることもある。この負の連鎖を断ち切るために、早くに第三者が救出することが必要で、こうした子どもへの予防教育により、着実な暴力防止の成果を挙げている。

（推薦者：ウィメンズセンター大阪）

“子どもたちが自分を大切な存在だと実感できる” – そんな社会を実現するためにこのたびは社会貢献者として表彰して頂きましたことに、心より感謝申し上げます。

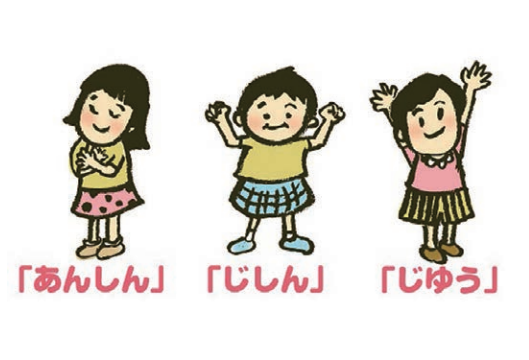
CAP センター・JAPAN は1998年より子どもが日々安心して安全な生活を送れるよう、子どもの視点に立った暴力防止活動を行っています。日本の北部にあるもう一つのCAP トレーニングセンターである一般社団法人J-CAPTA（2009年設立）、そして地域で活動するCAP グループとともに、幼稚園、保育所、学校、社会的養護のもとで暮らす子どもたち、障がいのある子どもたち、そしてその身近にいるおとなにCAP（子どもへの暴力防止）プログラムを提供しています。1995年に日本でのプログラム実践者養成が始まり、20年を超える活動のなかで553万人以上の子どもたちとおとながプログラムに参加しています。2000年に児童虐待防止法が施行される以前から子どもへの暴力防止をテーマに、地域で着実に予防教育に取り組んできたことが、今回の受賞への評価につながったものと受けとめています。

しかしながら、近年、子どもが暴力（心とからだを傷つけられること）にあいやすい状況は深刻さを増しています。今回制作していただいた団体紹介映像の中でもお伝えした子どもへの暴力の状況を示すデーターそれらの「子どもたちのいま」を意識して、おとながこの事実と向き合っていく必要があると痛感しています。子どもが自分の感覚を大事にして、嫌なことはイヤと言えるようになるためには、身近なおとなが日常生活の中でそのメッセージを伝え、また、なるべく早く子どもの変化に気づき対応するための知識とスキルを持つことで、あらゆる場面で防止をすることができます。そして、何よりも子ども自身が自分の感覚や気持ちを大事にしてもいいと知ることが必要です。すべての子どもとおとなが被害を受ける前に知識とスキルを持つ – 予防教

育にもっと目をむけてほしいと願わずにはられません。

表彰式典では、さまざまな分野の方との出会いがあり、ご尽力されているお姿に感銘を受けるとともに、多くの刺激を頂きました。「誰もが生きやすい社会」をめざし、皆さんとそして社会全体と無意識ではなく、意識と覚悟を持って、つながっていくことが必要なのだと改めて感じました。私たちは、これからも、子どもへの暴力に対する予防教育の必要性を多くの方に知っていただく努力を続け、誰もが生きやすい社会づくりをめざしてまいります。

事務局長 長谷 有美子



▲子どもに特別に大切な3つのけんり



▲安心・自信・自由ギャラリー



▲子どもへの暴力防止のための基礎講座



▲子どもへの暴力防止のための基礎講座2



▲模擬子どもワークショップ



▲チャイルドビジョン講座

宇治市介護者（家族）の会



京都府

京都府宇治市で1986年から、高齢者を介護する介護者の辛さや心細さを少しでも和らげ、介護者を取り巻く環境を改善することを目的に活動を始めた。介護保険制度が導入され、介護の形態が変化する中で、介護者同士で互いに支え合うため、情報共有できる地域の集いの他に他の地域の介護者の会との交流会や医師等の専門職と講師として招いた講習会や学習会を毎年開催している。また、地域のポータルサイト「eタウン・うじ」を通して一般市民へ情報発信を行うとともに介護者の生の声を行政に反映させる活動を約130人の会員が続けている。

（推薦者：宇治市）

渉外担当（前世話人代表）

長谷川 笑子

高齢者を介護する介護者の「介護のつらさ、心細さ」などを少しでも和らげ、活動によって介護を取り巻く環境を改善することを目的に1986年「宇治市ねたきり老人介護者（家族）の会」発足、1987年から1990年にかけて宇治市の委託を受けた介護者教室に参加する形で「地域のつどい」を開催、1993年会の名称を「宇治市老人介護者（家族）の会」に改め、支援会員、賛助会員制度を採用。1994年に紙おむつ共同購入を始め、業者の協力を得て紙おむつのモニターを行ったり、当事者の食事を栄養士の方に料理教室で学ぶ活動や、機関誌「ほのほの」の発行、会員の親睦交流、地域のつどい、福祉まつりの参加、他の地域との交流会又、医師や専門職を講師に招いた講習会や学習会などを行ってきました。

2000年に「宇治市介護者（家族）の会」に名称を改め、介護保険制度施行前に発足し今年で31年目を迎えることになりました。会員は正会員45名、支援会員、賛助会員を含め125名。第49回社会貢献者表彰という立派な賞をいただきありがとうございました。

受賞決定のお知らせを受けそれからの私は気持ちが落ち着かず、参加者と打ち合わせをさせて頂きました。新幹線からの富士山が、青空の下、雪をかぶる美しい姿を見て翌日の表彰式典が待ちきれませんでした。当日早く目が覚めました。担当の方々のご指導で写真撮影、リハーサルに臨み、式典では会長より表彰状を手渡していただき大変誇りに思っております。53件の本当に大変な活動を行う受賞者がいて、私たちの会はまだまだだと思いました。

宇治市市長が要介護者と介護者の実態を踏まえた「認知症の人にやさしいまち・うじ」を宣言され各地区で「レモンカフェ」を開催されています。宇治市市長に報告に行きました。その時の言葉「最高の賞ですね」いつもだったら喜びのことばですが、

メッセージを文章にさせていただきました。この言葉は30年間の実績を認めて下さったのだと思います。このいただいた賞金を皆様になにかの形でお返ししたいと思います。「ほのぼの」に記し、報告、希望を聞き活用させていただくよう考えております。

私も団体の代表として人生最高の時をいただき、現在介護している主人を大切に、会を含めまだまだ頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

渉外担当（前世話人代表） 長谷川 笑子



▲学習会 アロマセラピー実技の一コマ



▲学習会 事前指示書に書く方法の講演会



▲宇治市主催 リフレッシュ事業で介護体験発表



▲市民と市長の対話 ミーティングの一コマ



▲親睦交流会あがりゃんせ 認知症予防ゲームの一コマ



▲認知症の人と家族の会 南部地域交流会

中村 信也



東京家政大学 家政学部
栄養学科 教授

東京都

東京家政大学教授で医学博士の中村信也さんは、7年ほど前に出席した学会で、児童養護施設などで暮らした子どもたちが高校卒業後に進学を希望しても、学費を捻出することや奨学金で進学しても返済に苦勞するなど非常に厳しい状況にあり、進学を断念せざるを得ない現状であることを知った。彼らにこそ就学の機会を持って欲しいと2010年に「中村信也就学基金」を設立した。毎年ほぼ2名に、これまでに完全給付で12名の学費（約2千万円以上）を支援している。支援を受けて進学、卒業した人たちは保育士、ホテルマン、化粧品会社勤務などの職業に就いている。

(推薦者：高橋 亜美)

このたび社会貢献者表彰を戴き、社会に認めてもらったことは率直に嬉しいし、これからの継続意識を掻き立ててくれます。

受賞して気付いたことは、社会貢献の仕方には多様なものがあるということです。日本人は優しい親切な民族であることは自他ともに認めていまいしょうが、具体的な形で実行することが苦手です。受賞者同士で語り合いましたが、社会貢献は皆身の丈の社会貢献をやっていると実感しました。自分に無理のない程度にまず実行が重要だと悟りました。

私の社会奉仕は、虐待を受けた子どもたちが施設に入っていて、その子どもたちに高等教育、または専門職業を手付けさせることです。1年に2名を大学、専門学校に行かせることですが、皆、大変なお金がかかるといいますが、医者もやっていますので、大きな負担ではありません。身の丈で2名限定にしています。

子どもがいない自分にはこの世で何か残すものがないかを探していましたが、福祉学会で知り合った児童施設の職員の方から、被虐待児の実情を知らされました。施設の男子は中学校を卒業すると自分で職業を探してくる、女子は高校まで行かせてもらえるが、施設を出て自活することは大変で、風俗に行かざるを得ない、と聞きました。「それは不平等だ！」と強く感じました。咄嗟に身の丈支援で年間2人可能と返事し開始しました。開始後2年目で中村教育基金を立ち上げ、責任者に任せ自分は振り込むだけで、持続することを約束しました。返金義務はなく、卒業後施設の子たちに勉強を教えたり、社会のことを教えたりすることが義務です。

開始後、全国の施設にさざ波を起させたと聞きました。施設の方が努力さえすれば難関でも夢がかなう道があると、という言葉が言えるようになったとのこと。そして、子どもたちに職業とは何かを教えねばならなくなったことです。

卒業した子、これから入学する子たちの報告を聞くと、心地よい音楽に聞こえます。笹川陽平氏が社会貢献を熱く語っていらっしゃいましたが、全くその通りと財団の趣旨をかみしめました。



▲基金を利用した学生の卒業式の会場



▲基金を利用した木村まりえさんの新聞記事



▲専門学校に進学した山本昌子さんの卒業式



▲山本さんが立ち上げた ACHA プロジェクト



▲専門学校に進学した山本昌子さんの卒業式

島田 豊実



シマダデンタルクリニック
院長

兵庫県

歯科医師である島田さんは、2000年に歯科医院を宝塚市に開業以来、2008年から近隣の児童養護施設で暮らす子どもに対し、無料で矯正歯科の治療を行っている。施設の子どもは、そこに来るまでの生活環境から、歯の健康状態が悪い子どもが多い。親からの虐待やネグレクトにより、口くう崩壊が生じ、ボロボロの歯並びになって、食べられなかったり、笑うことをためらっていた子どもが、治療をきっかけとして、人前に出ることが楽しくなったと、コンプレックスの解消につながっている。子どもが劣等感を抱き、就職や結婚に不利益を被らないようにと、通常数10万から100万円ほどかかる治療を無償で行う。2012年に西宮市へ移転後、神戸市、兵庫県の30施設に拡大、現在、近畿ブロックの100施設を対象としている。夢や進学を語り合う会や職場見学会等を開催し、彼らと関わる中で、施設出身の子どもの大学進学率が11%と極端に低いことに着目。地域共生を元に、大学進学までのさまざまなロールモデルを作り、今年も大学進学を出すなかで、今春より、近畿の都道府県、政令指定都市の子ども課をまわり、矯正治療のボランティアならびに大学進学へのロールモデル作りを紹介している。

(推薦者：島田 豊実)

この度は、私どもの社会貢献活動を表彰して頂き、誠に光栄に存じます。

ある児童養護の施設長から「先生の一々していることを世の中に知ってもらい、多くの職業人の方が、施設へのボランティアに参加して頂けるように呼び掛けてもらえないか」とのお申し出を頂き、あえて自薦により応募させて頂きました。

私のボランティアは、児童養護連盟の関西ブロックに所属する、約100施設すべての子どもを対象に、無料で歯科矯正治療を行う事により、養護施設の子供の社会復帰を支援しようとするものです。この対象者を拡大し、施設退所後、大学に進学した学生や社会人（一部有料）も受診しています。

歯科矯正はご存知の通り、社会保険の対象ではありません。自費診療であるが故に「歯並びを整えたい」と思っても、「学校検診で咬み合わせが良くないことを指摘」されても国ならびに県、市からの補助費（措置費）では、まかないきれないそうです。

この子どもたちが将来、顔からのコンプレックスを抱くことなく、また、きれいな歯並びで可能となる“歯垢を磨き残しなくする歯みがき”による口腔ケアにより、う蝕・歯周病が予防できて生涯自分の歯で食物の摂取を行うことが出来るようになり、このことにより、心身の健康を維持し、社会にりっぱな成人として活躍できるよう、お役に立てないか、という気持からの運動です。

さらに、将来への夢や進学を語り合う会や職業見学会を開催し、彼らと関わる中で、施設出身の子どもたちの大学進学率が11%と極端に低いことにも着目しています。

大学進学を希望している学生には治療と並行して、地域共生を念頭に、さまざまなロールモデルを形成し、複数の成功例を出してきました。次回は、施設で育てられた

子供たちに里親に育てられた大学生たちも加えて、協同でロールモデルを創るという設定を思考し、さらなる「ソフトの質と量での拡大」を視野に入れています

この春、都道府県、政令指定都市の子ども課をまわり、矯正のボランティアならびに大学進学へのロールモデル作りを紹介しました。同時期に、いくつものマスコミに取り上げて頂き、NHK ニュースが全国に情報を流すまでに至りました。

国の底辺の底上げとなる「貧困と医療」「貧困と教育」の両面の抱える根本問題を解決しつつあると感じ、いずれもこれらのソフトを、将来への社会保障政策に役立てて頂ければ、と希望しております。

そのような中、このような大きな賞を頂戴し、さらなる「社会的認知に繋げること」ができますことに対し、心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

施設の子供 夢応援



歯の矯正治療に力を入れる
「歯の矯正治療に力を入れる」

歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。

歯の矯正無償で治療

西宮の院長 08年から100人診察

歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。

歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。歯の矯正治療は子供の将来を左右する重要な治療である。

▲毎日新聞 2015年9月1日



▲シマダデンタルクリニック

認定特定非営利活動法人 チャイルドラインほっかいどう



代表理事
坂本 裕子

北海道

子どもの貧困率は全国平均で6人に1人とされている中、離婚率が高い北海道では5人に1人の割合。生活困窮や母子家庭の数に比例して子どもが一人で抱え込んでしまう問題も多くある。そんな状況を背景に、2004年北海道で初めて、18歳までの子どもが誰にも言えない悩み等を話せる「チャイルドラインさっぽろ」が開局した。子どもたちに、悩みを話せる所、「チャイルドラインさっぽろ」の存在を周知するため、これまで13年間、北海道全域の小中学校に、26の市教育委員会・140の町村教育会と連携し、45万6千枚の電話番号を記載したカードと、学校に2千枚のポスターを配布し、聾啞学校や特別支援学級も含め、普及に努めている。また、電話を受けるボランティアの養成研修も行っていて、子育てが終わった人や、心理学を学ぶ大学生などが受講する。メールやネットが主流の中、電話の声を通じて、誰かと繋がってみたい、聴いて欲しいという子どもは増えていて、人間関係・恋愛・いじめ・体に関する事など内容は多岐にわたり、不安・つらい・さびしいと訴える。2015年度の受信数は7,119件にも及んでいる。2017年に「チャイルドラインほっかいどう」へ名称を変更した。

※チャイルドラインは1970年代に北ヨーロッパで発祥されたと言われており、日本で初めて開局したのは1998年、現在では40都道府県で70余団体がチャイルドラインの活動をしている。

(推薦者：認定特定非営利活動法人 チャイルドライン ほっかいどう)

「チャイルドライン」とは18歳までの子どもがかける専用電話です。

「お説教ぬき、押し付けぬき、子どもたちの声にただただ耳を傾け気持ちを受け止める」を基本姿勢にしており、問題解決を目的とはせず、子どもの声の「気持ち」「こころ」に寄り添いながらの傾聴を大切にしております。電話を受けるにあたって、子どもたちが安心して電話をかけることができるように「4つのやくそく」をしています。① ひみつはまもるよ ② どんなこともいっしょに考える ③ 名まえは言わなくてもいい ④ 切りたいときには電話を切ってもいい、の4つです。北海道初のチャイルドラインとして、2003年7月に『チャイルドラインさっぽろ』が設立総会を経て立ち上げられ、翌年の7月に子ども専用電話が開局されました。そして2005年3月にはNPO法人として認定され、さらに2013年1月に「認定NPO法人」として札幌市から認定されました。2017年度には『チャイルドラインほっかいどう』と名称変更しました。設立15年目を迎えて北海道全域に向けて啓蒙活動を今以上に広げたいと思います。

このたび公益財団法人社会貢献支援財団より名誉ある賞をいただき心から感謝の気持ちで一杯です。この気持ちを支えにこれからも活動していきたいと思います。また懇談会や式典を通じて他の受賞団体の活動内容も聞く事が出来感銘を受けました。この機会をいただき誠にありがとうございました。

「チャイルドライン」は、自分の気持ちを聴いてほしいと願う子どもたちが安心して
 できる「心の居場所」であることを目指しています。そして子どもの主体性を尊重し、
 子どもたちが自分の問題を自ら解決に向かっていける力を信じて子どもの「心の声」を聴き気持ちに寄
 り添って支えていくことを目的としています。チャ
 イルドラインの誕生は、1970年代の北欧で、その後
 全世界に広がり、現在は「チャイルドヘルプライン」
 として150ヶ国がつながっています。1960～70年代
 にかけて急速に世の中が変わり始め、それに伴い子
 どもたちの生育環境も大きく変わり、何らかの苦し
 みや辛い思いを訴えることのできる場所が少なく
 なってきました。現在の子どもたちの取り巻く環境
 はネットの普及でさらに変わってきており、いじめ
 や虐待や貧困など子どもたちにとってますます厳し
 い環境になっています。そうした中でも私たちは、
 電話での初めての出会いで顔も見えない声だけを頼
 りにかけて来る子どもに寄り添って、気持ちを受け
 止めていくと言う活動を続けており、昨年度は総受
 信件数6,452件で会話成立件数は1,773件でした。北
 海道の小・中学校の全生徒約43万人には毎年、そし
 て今年からは高校の生徒たちにもフリーダイヤル記
 載の「チャイルドカード」を配布して啓蒙活動を継
 続しております。

いかに「自分のことを聴いてくれる相手」が身近
 にいないか、また「余計な気を使わずに話ができる
 相手」が少ないかを痛切に感じています。「あるが
 ままの自分」をそのまま受け入れることができ、ま
 たそういう自分を分かってくれる人がいると幸せに
 なります。全国の受け手のボランティア仲間が力を
 出し合い日本の子どもたち、そして社会の在りよう
 を変えていく力になればと思っています。

今回の表彰を機に気持ちを新にして子どもたちの
 話に耳を傾けたいと思っています。

代表理事 坂本 裕子



▲カード発送作業



▲電話室風景



▲公開講座代表挨拶



▲日本ハムファイターズよりカード贈呈セレモニー

小平 晴勇



寿司職人兼アマチュア落語家

長野県

「君は顔がおもしろいから落語をやりなさい」という高校時代の恩師の一言で、落語研究会を設立し、校内で落語会を開いたところ受けを受け、落語の魅力に引き込まれ、落語家で諏訪市内に寿司屋を営むあいらぶ祐介師匠に弟子入りし、以来、同市で寿司屋とアマチュア落語家の二足のわらじで47年になる。県内2,500カ所の福祉施設などで、古典から創作まで51本の落語のネタをボランティアで披露している。落語の他に切り絵、飾り寿司の講師、ラジオのパーソナリティ、チンドン屋、創作落語台本作家としても活躍中。最近はブラジルや中国からも高座の依頼が来ている。

(推薦者：山田 哲郎)

「この着物を差し上げます、落語を演じる時に来て下さい。本当に受賞おめでとうございます」

差し出されたピンク色の見事な着物だ。ビックリして顔を見ると、いつも落語会で会う介護施設のおばあちゃんたちだ。なんとおばあちゃんたちの手作りだそうだ「私たちも自分の事のように、とても嬉しかったわ。だっていつも嫌がらずに施設に来て落語を演じてくれるのは「すわこ八福神」あなただけだもん」この言葉を聞いて仕事が忙しかったり、体調が悪い時など出演を辞退しようと思ったが、本当に続けてよかったし、人びとに喜ばれていたんだと実感することが出来ました。

その後もマスコミの報道等で「すわこ八福神さんの受賞を知りました」とのことで、お祝いの手紙や電話をいただきました。そして落語会2,800回を突破しました。改めて受賞した社会貢献者表彰の重みを実感しました。

来年で寿司と落語の仕事に携わって50年を迎えます。増々、寿司も握れるし落語も演じられる、これが本当の一石二鳥が人気のためか、来年10月まで既に仕事が入っています。いままでの記録である、落語会1日7ヶ所や1ヶ月35回、2週間ぶっ続け、一席3時間落語などの記録の更新に挑戦し、いよいよ落語会3,000回を迎えます。

最近は日本を離れて中国やブラジルなど海外からの希望が多く、ぜひ中国語で一席と要望があり、中国語の勉強に熱が入ります。

いよいよ高齢化社会の本番を迎え、700万人の認知症患者が押し寄せてくると言われています。そんな世の中で増々、落語ボランティアの必要性を感じます。皆様に楽しんでいただき、私も充実した人生を送る。それが私の目標です。

本当にありがとうございました。



▲私の作ったすし



▲結婚式でのチンドン屋



▲公民館で一席



▲会場の「帝国」ホテルと「定刻」を掛けたネタで沸きました！



▲社会貢献者表彰式典 受賞者懇談会で一席



▲自作の切り絵 天下の大祭 御柱祭

認定特定非営利活動法人 佐賀県難病支援ネットワーク



理事長
三原 睦子

佐賀県

難病患者が抱く悩みや不安は病院や役所では相談しづらいことから、同団体は2003年から佐賀県下を中心に、年間6,000件以上の難病患者の生活・就労・医療・福祉等多岐に渡る相談に対し、ケースワーカーやハローワークの担当者、医療関係者ら専門家との連携により、患者ひとりひとりに対してのケース会議を開催し、今後の生活への不安の解決、生活の質を高める為のきめ細かな支援活動を行っている。病状の悪化により、退職を余儀なくされた患者に、理解ある企業を紹介するなど、生活も含め、心と体を支える活動により、これまでに100名以上の難病患者の就労に寄与してきた。熊本地震では、混乱の中で支援を言い出せなかった患者の経験を通じて、緊急時には、薬や必要な医療介助について提示出来るように、病名や症状、主治医、治療法や服用している薬等も記載できる、緊急医療支援手帳を行政と協働で製作する他、緊急避難を想定して、難病患者への避難訓練も実施している。

(推薦者：佐賀県庁 県民環境部 県民協働課)

この度は、社会貢献者表彰を受賞賜り大変光栄です。ありがとうございます。

表彰式では、安倍昭恵会長のご挨拶に続き、内館牧子表彰選考委員長のお話をいただきました。また祝賀会におきましては、会長自ら私どもと写真撮影をしていただき大変に感謝申し上げます。

表彰式の前に皆様の活動紹介があり、毎日地道に様々な社会貢献活動を行われている方々の素晴らしい活動を聴かせていただき内容は違ってても社会貢献していくという志は同じだということに改めて感じました。

さて、私ども認定特定非営利活動法人佐賀県難病支援ネットワークは平成14年より難病の方々の相談支援を行い、平成16年からは佐賀県難病相談支援センターの指定管理を受け、患者の立場に立った相談支援を行っています。

難病という言葉について、治らない病気、難しい病気、寝たきりという捉え方により、就学、就労、結婚、出産など、人生の大事なイベントにも支障がある状況があります。

また治らないという病気を抱えながら生きて行かなければならないという大変な精神的にも身体的にもリスクがあります。

そういう方々が地域で普通に暮らしていける社会の構築が私たちの目的でもあります。

同病の方々の交流会を行うことにより、ひとりではないことが分かり、前向きに病気を捉えることもできます（ピアサポート）。

支援の内容は、就労支援、手帳や障害年金、医療費などの制度の支援、コミュニケーション支援等、難病になった方への心のケアなどを行い、必要であればアウトリーチ

による支援を行っています。

難病の数は今指定難病に指定されている疾患だけでも330疾患あり、同じ病気でも相談内容は個々に差があります。

相談員は、本人の言葉を傾聴し、制度に結びつく事例などは、制度に結びつけていくことが必要であり、難病相談支援センターだけでは解決しないことは、関係機関との連携により、課題を共有しながら本人の自立に向けた支援を行います。

また相談を受け課題を分析し、課題の克服のために提案型事業を行い、克服した事例や成果物（大規模災害時における難病患者の行動支援マニュアル等）を患者に還元させていただいています。

提案型事業には難病患者の就労支援を地域で充実するために、シンポジウムを開催し、大規模災害時における避難訓練などを地域の方々と難病のある人とともに開催するなどして、難病や障害を理解してもらえるような自助や共助の大切さなどを啓発させていただいています。

今後もこの賞をいただいたことを、真摯に受け止め、難病の方々への支援に一層邁進してまいります。

理事長 三原 睦子



▲平成23年度避難訓練



▲平成28年度コミュニケーション研修会



▲要援護者シンポジウム平成23年度



▲そうたくん記者会見 希少疾患IQトリソミーのそうたくんの研究費を捻出するための募金活動を企業と協働にて記者会見しています

門戸 竜二



千葉県

「大衆演劇のプリンス」と呼ばれ数々のステージで演じる俳優として活躍しながら、大阪府岸和田市の児童養護施設「岸和田学園」「あおぞら」が主催する「にじいろ夢コンサート」へ出演し、出演する施設の子どもたちへ演技指導を2010年から行っている。門戸さん自身も同学園の卒園者。人の心を動かす仕事に就きたいと役者を目指し、小さい頃別れた母に会えるかもしれないと本名を芸名にしている。「親がいないために運動会や学芸会で注目されることのない子どもたちにスポットライトを浴びる喜びを知ってもらい、自己肯定感を持ってほしい」と活動を始めた。同コンサートの収益の一部、物販の売り上げやファンからの募金は「にじいろ“夢”基金」に寄付され、施設を卒園し、進学、就職していく子どもたちへの支援などに充てられている。

(推薦者：社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会)

この度は、「社会貢献者表彰」を受賞させて頂き、かなりの反響があり多くの方々から、「おめでとう」「努力が報われたね」など有り難い言葉を多数頂きました。

自分一人で出来ることではなく、各会場に足を運びグッズなどの売り上げにも協力していただいたお客様一人一人のお力添えの賜物だと改めて痛感して居ります。

受賞式当日、様々な場で活躍（活動）している方達との語らいの時、いろんな遣り方やこんなに日々努力されている詳細な話を聞いた時、まだまだ自分も頑張っているのではと、力を頂きました、そして、自分自身が養護施設出身だからこそ出来る事を各方面や地域に広げていけるのでは？との可能性を感じながら決意を新たにする事が出来ました。尚一層、今までの活動に邁進し子供達の未来の為、独り立ちして行く時の少しばかりの支えに成って行くための努力を積み重ねて行く所存です。

来年の、第9回「にじいろ夢コンサート」を7月に岸和田浪切ホールにて開催致します。一人でも多くの方々に、恵まれない家庭環境の中でも立派に頑張っている子供達を観に来て頂き、感動していただきたい。

更に、「にじいろ夢基金」の拡張にも今まで以上の取り組みで活動の場を広げて参ります。

本当に有り難う御座いました。



▲にじいろ夢コンサート開演



▲にじいろ夢コンサート2017年 フィナーレ



▲にじいろ夢基金のグッズ紹介 売り上げ金を寄付



▲男子の舞踊



▲大衆演劇祭り2017年 全国ツアー 門戸さん（中央）



▲子どもたちの舞踊とフィナーレ「祭りの神」



▲職員の方々のコーラス



▲新人職員の皆様と

金森 忠一／金森 泰子



神奈川県

泰子さんは、夫の忠一さんの飲酒問題について学ぼうとセミナーに参加した後、1985年に発足したばかりの「パトリス家族会（アルコール依存症の家族の会）」に参加し、これまでずっと運営に携わっている。忠一さんは、泰子さんの心配りを察して、自らの飲酒問題を解決しようと1990年に「川崎断酒新新生会」「神奈川県断酒連合会」に入会して断酒を継続しながら、会の事務局長や支部長、会長などを務め、会員の断酒継続を支援している。泰子さんは、2007年に川崎断酒新新生会の中に休会中だった「つばき家族会」を再開し運営に

携わっている。忠一さんは、川崎市麻生区で活動する他の7団体（うつ病や認知症、精神障がい者の家族の会など）とともに1990年に「ASAO 健康井戸端会議」の発足に携わり、現在代表を務めている。同区社会福祉協議会や保健福祉センターと連携して、精神疾患を持つ人の通所施設2カ所の設立に取り組んだ。アルコール依存症の問題、飲酒運転撲滅運動、心の病の人たちへの理解を深めるための地域での長年に渡るボランティア活動を継続している。

（推薦者：田中 元介）

この度は、社会貢献支援財団より私たち夫婦が共にこの様な荣誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。思いもよらずの受賞で身の引き締まる思いがいたします。

表彰式典の会場では今回受賞された多くの方々と触れ合う機会をいただき、皆様の活動内容の素晴らしさに感動致しました。

私たちの活動が社会に貢献したという評価をいただきましたが、アルコール依存症者である夫の忠一の病いからの回復を目指す自助活動が私たちの原点となりました。

忠一は永年の大量飲酒・問題飲酒により妻子・親・兄妹はもとより周囲の人々を長年苦しめ続けて来ましたが、妻の泰子の理解と協力もあり、自身が依存症という病気であることに気づかされたお蔭で医療には無縁のまま、平成2年の5月に「川崎断酒新新生会」に入会、以来断酒を継続しています。

平成6年からは神奈川県からの委嘱をいただき、酒害相談員として現在までアルコール関連問題に悩み苦しむ方々の相談手を務める等の活動に取り組んでいます。

断酒新新生会につながった半年後の11月には「川崎市麻生区役所保健福祉センター」のご指導をいただき、川崎市の麻生区・多摩区を拠点として活動をする精神的な疾患に悩み苦しむ当事者、ご家族の方々と出会い、自助グループ「ASAO 健康井戸端会議」の立ち上げに参画し、平成8年から現在まで代表を務めています。

その間行政、医療関係、地域の皆様によるご支援をいただき、統合失調症当事者の通所施設2ヶ所の立ち上げ、運営にも携わって参りました。

泰子は夫の「アルコール依存症」という病気からの回復を願い、家族会につながり、

家族の対応等の勉強を重ねて35年が経ちました。現在では夫と共に酒害相談員としてアルコール依存症に悩み苦しむご家族の方達の相談相手を務めています。

この表彰受賞は日頃ご支援、ご指導を頂いている麻生区役所・麻生区社会福祉協議会の方々はじめ、断酒会・家族会・地域で共に活動する仲間の皆様のお陰と感謝しております。今回の受賞の喜びを励みに、今後の活動に取り組んで参ります。

本当にありがとうございました。



▲ 飲酒運転撲滅を呼びかける忠一さん



▲ 仲間たちと



▲ パトリス家族会の運営に長年携わっている泰子さん



▲ ASAQ 健康井戸端会議20周年記念講演会 講師は音無美紀子さん



▲ 神奈川県断酒連合会 酒害相談員研修会の様子



▲ 毎月1回土曜日に講師を迎えてのパトリス家族会教室

鈴木 次郎



仙台旭ヶ丘ホタルとメダカの会 会員

宮城県

宮城県仙台市で1999年に結成された「台原森林公園にホタルとメダカを呼び戻す会」（2011年に現在の「仙台旭ヶ丘ホタルとメダカの会」に改称）に発足当時より所属。ゲンジボタルの保護に取り組み、ホタルの幼虫の餌となるカワニナ（巻貝）が減らないように、カワニナが好むキャベツの葉を川底に置いて増殖に取り組んでいる。生息地の環境の保全、飛翔期には鑑賞者のために行灯の設置、小学生のホタルの里見学の案内などを行っており、地域の人々から「ホタルの鈴木さん」と呼ばれ親しまれている。また、日頃から町内会の役員、小学生の安全見守り、公園の清掃や除草などにも取り組んでいる。

（推薦者：仙台旭ヶ丘ホタルとメダカの会）

私がゲンジボタルの保護活動を始めた場所は、仙台市の中心部から北の方向へ5 kmほど離れた台原森林公園（面積60.4ha）内の「ホタルとメダカの里」であります。

この公園は1973年に開園し、仙台市が明治百年記念公園として整備した公園で、地下鉄旭ヶ丘駅に直結しているため多くの市民から親しまれています。

この公園が整備される以前、昭和30年代までは平地に水田があり、ホタルやメダカが生息していましたが、公園整備により絶滅し、全く見られなくなりました。

地域の有志が「台原森林公園にホタルとメダカを呼び戻す会」（後に会名改称）を結成、2000年6月に金成町の「ゲンジボタル愛好会」に懇願して贈られた親ボタルを放しました。この地に産卵したホタルが自生し、翌年から毎年6月に淡い光を放ち乱舞するようになりました。

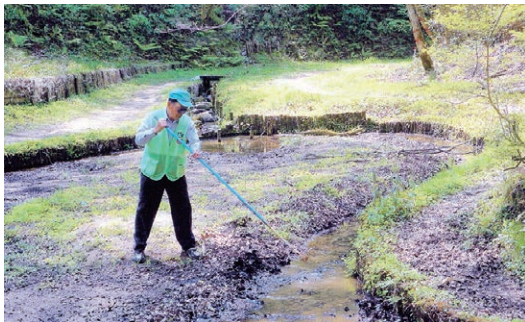
私はこのホタルを守るため、何を為すべきか、ゲンジボタルの生態などを学び、先ず出来る事からと思い、ゲンジボタル幼虫の保護活動を最優先にしました。幼虫の餌は、カワニナ（巻き貝）で、これが不足するとホタルは、絶滅する恐れがあります。仮に川底に百匹のゲンジボタル幼虫が生息した場合、幼虫が蛹になるまでカワニナは1万個以上必要であると専門書に書いてあります。幼虫生息エリアは狭いため、カワニナ不足になり易く、カワニナの繁殖率を高める必要から、餌は自然界で食する餌より、人為的給餌方法により栄養価の高いキャベツを与えることにしました。キャベツの葉は1週間で網の目の如く食い尽くされます。葉の裏面には産んだ稚貝がたくさん付着しているのです。カワニナの繁殖期は5月～10月で、キャベツの葉を流されないように手を加え川底に配置します。

このキャベツを入手するため、スーパーマーケットをまわり、売場で剥がして捨てられる葉を、店員にお願いして持ち帰ります。大概の店は持ち出し禁止になっている

ので、貰える店を捜す事が大変です。

毎年ホタルの飛翔期間中に多くの子どもたちが、両親と共にホタルの里に集まり、暗い夜空に乱舞するホタルを見て大騒ぎし、感動している姿を思うと、日々の厳しい保護活動の辛さなどは忘れてしまいます。

この度の表彰式では、様々な活動にご奮闘されている方々がおられるのに驚きました。大方の受賞者は、何らかのハンディキャップを負う人々のために尽くされた功績に対する表彰のようですが、私の場合は小動物保護の仕事は気楽です。身に余る表彰に恐縮しております。社会貢献財団の表彰受賞者どなたも、この事業をいつまでも継続されることを期待していると思います。心から貴財団のご発展を祈念します。



▲「旭ヶ丘ホタルとメダカの里」を常時観察して小川の流れや有害物がないか確認する鈴木さん



▲カワニナの餌になるキャベツの葉を準備中



▲ホタルの幼虫は殻に潜り込みカワニナに食いついていた



▲旭丘小学校3・4年生の総合学習でゲンジボタルの生息地を案内する鈴木さん



▲後日確認したキャベツの葉は食い尽くされ カワニナが4個くっついている



▲小川の川底にキャベツの葉を置く作業中

平田 弘子



日回りの会“きんようきっさ”代表

広島県

広島県福山市で、路上生活者支援に取り組んでいる。20年近く前から路上生活者への炊き出しや弁当配布、生活相談支援を始め、同市と協働しての活動も15年以上にわたり、路上生活者の入院、入居保証人、亡くなった後の葬式までも対応してきた。支援を受けたひとたちからは「おかあさん」と呼ばれ慕われている。平田さんは6年余居住していた尾道市から、月2回福山市に通い元路上生活者の居宅生活支援として、居場所作りの「きんようきっさ」を開設、今年7月には福山へ転居し、路上生活者も人の心は同じ、民族の区別もないと活動を続けている。

(推薦者：福山市)

この度は身に余る表彰状並びに尊い副賞を賜り誠に光栄に存じます。

4年前の頸椎骨折の事故の為、歩行も不自由な私のために、市のご配慮で2人の方が同行して下さり、晴れの式典に参列出来ました事を心より感謝しております。

私は1995年1月に4人の弁護士を含む有志8人で「子どもの生命と権利を守る会」を立ち上げ、所属するキリスト教会に拠点を置き「SOS子ども電話相談」を開局しました。

チャイルドラインに引き継ぐまで10年間教会で、後には各当番の自宅で電話相談を受け、学校へ連絡したり、保護者への講演活動もしました。

路上生活者への支援は、東京、大阪、広島へお米や毛布などを送っていましたが、福山でも路上生活者が居られることを知って、2001年10月から教会の有志で昼食の炊き出しを始めました。カトリック教会を拠点として、夜廻りを1998年からされている事を知って、12月から私も参加させて頂き、昼間は第二、第三、第四の土曜日に、夜は毎日曜日に炊き出しに参加し、昼と夜のボランティア同士も仲間として助け合うようになりました。

ボランティアの仲間から提案して、2004年から4月と11月に福山市の福祉課と社会福祉協議会との合同行事として路上生活者を招いて交流会をすることになりました。路上生活者の健康チェック（11月には結核検診を含む）、衣類やカップ麺等の提供だけでなく同じ食卓でカレーを食べ、カラオケやゲームで楽しい一時を持ち、生活福祉課が一人一人の話を聞くという行事を欠かさず続けています。今年も11月に第28回を終えました。

路上生活者の高齢者や女性には特に注意して、困ったときには連絡をするようにと私の電話番号を教え、その連絡で癌の手術をし、亡くなるまで9年間5つの病院で治

療をされ、87歳までお付き合いした人もありました。

路上生活を余儀なくされた人は、必ずしもご本人だけの責任ではなく、不運が重なった人もあり、人が好きすぎて財産を無くした人もありました。どんな人であっても一度だけの人生をその人らしく生きてほしいと願って、おせっかいをしてきました。出会った人とはご縁があったと思い、困っている人にはできるだけ力を貸して差し上げたいと思います。

東京で出会った方々のご活躍に励まされ、これからも「きんようきっさ」を続け、出会った人と共に残された時を大切にしていきたいと思っています。



▲「きんようきっさ」の様子



▲「きんようきっさ」看板 第2・4金曜日に路上から居宅に移った人の孤立を防ぐために開催 食事をしながら相談を受ける



▲「交流会」路上生活者 生活困窮者 福山市福祉事務所 保健所 市恵ボランティアとの交流会 同じテーブルで食事をしながら相談を受けてアドバイスする



▲「夜回り」の様子 毎週日曜日に行っている



▲公園で手作りのお弁当やケーキを配り名簿を確認している

ラブ・ジ・アース実行委員会



会長
北村 明広

東京都

ラブ・ジ・アース実行委員会はバイク（オートバイ）乗りに向けて「バイクに乗れるからこそ感じられる自然から得た気持ちを大切に、地球のために何かを始めよう」と、バイク業界で広告業や出版業に携わる北村明広さんの呼びかけで2002年に発足した任意団体。2003年から毎年春と秋に日本各地の海岸で「ラブ・ジ・アースミーティング」と呼ばれるボランティア清掃活動を主催している。これまでに30回開催され、延べ1万2000人以上が参加している。回収するゴミは漂着ゴミが多く、数トンに及ぶこともある。清掃活動後にはステージイベントを行い、チャリティーオークションを実施して、売り上げをWWF JAPANへ寄付しており、10年以上継続されている。また「ラブ・ジ・アースミーティング」に参加したバイクショップなどが自主的にそれぞれの地域の海岸清掃を行うことが増え、開催の告知やノウハウの伝授、当日のサポートなども行っている。

（推薦者：浅井 大典）

この度は素晴らしい荣誉にあずかり、感謝の言葉もございません。これは、ご協力いただいた関係者、賛同するバイク（オートバイ）乗り全員の受賞であり、私は皆さまの代理として受賞式に出席したにすぎないと考えております。

私はバイク業界で広告・出版・イベント業にたずさわるなかで、一部のバイク乗りのマナーの悪さや、日本国内におけるバイクの社会的地位の低さを目の当たりにしました。このままでは日本のバイク文化は危ういと考え、「バイク乗りから始める地球愛護活動 ラブ・ジ・アース」を2002年に発足させ、「バイクに乗れるからこそ感じられる自然から得た気持ちを大切に、地球のために何かを始めよう」と呼びかけました。その一環として海岸清掃ミーティングを開催し、環境保護・社会貢献はもとより、バイク乗りのモラルと社会的地位の向上を目指しています。

実績としては、長年にわたり漂着物が放置されていた海岸を清掃したり、台風通過後に漂着した大量の流木を撤去したりなど、各地で多くの感謝の声をいただいています。また、海岸に落ちているゴミは行楽客がそこで捨てたもの以外に、河川から流れ込んだ家庭ごみや、海外からの漂着ゴミなど、環境問題がグローバルなものであることを実感させる要素が多く含まれているため、海岸清掃体験は参加者の以後の生活に大きな変化をもたらします。また、コミュニケーションも重視しており、相互に理解を深める好循環を生み出すことで文化の醸成につながっていくことも期待しています。

このミーティングは2003年に静岡県牧之原市（当時は相良町）にて第1回を行なって以来、毎年春と秋に開催し、通算30回続けて参りました。当初は“バイクのイベント”と聞いただけで自治体から開催を断られる有様で、途方に暮れていたところを相良町の担当者の方が「バイクのことはよく分かりませんが、とても良い試みですね。前例はないですがやってみましょう！」と道を拓いてくださいました。その後も牧之

原市では何度もお世話になり、今回の受賞もその担当者の方が推薦してくださったことで実現しました。この不思議な縁には本当に感謝しております。

今回の式典におきましては、他の受賞者の方々の崇高かつ息の長い活動を拝見するにつけ、“我々はまだまだ…”と身の引き締まる思いが致します。権威ある団体からの受賞を追い風として、これからも目標へ向けて力強く邁進して参ります。この度は本当にありがとうございました。

会長 北村 明広



▲みんなで協力してゴミを拾います



▲午後にはささやかな交流イベントを行ないます



▲ラブ・ジ・アースミーティング30th



▲参加者は近県各地からバイクで集合します



▲記念すべき 第1回ラブジアースミーティング



▲分別して集められたゴミの山

伊万里市カブトガニを守る会 牧島のカブトガニとホタルを育てる会 佐賀県立伊万里高等学校 理化・生物部



伊万里市カブトガニを守る会
堤 悠樹



牧島のカブトガニとホタルを育てる会 会長
堀 實



佐賀県立伊万里高等学校 校長
犬塚 加代子

佐賀県

佐賀県伊万里市の牧島地区に生息し、絶滅危惧種Ⅰ種に選定されているカブトガニを保護するため、協働して調査・研究・保護活動を行っている。1992年には92のつがいまで減少したが、地道な活動によって2011年からは毎年400～500のつがいが見られるようになった。2017年には677つがいを確認している。2015年に保護を進めていた繁殖地は「伊万里湾カブトガニ繁殖地」として国の天然記念物に指定された。伊万里市カブトガニを守る会は1979年から、牧島のカブトガニとホタルを育てる会は2006年から、佐賀県立伊万里高等学校理化・生物部は1962年から活動を行っている。

(推薦者：伊万里市教育委員会)

伊万里市カブトガニを守る会

この度の受賞、誠にありがとうございます。会員一同大変喜んでおります。

昭和54年5月から当会の設立準備に取り掛かり複数回の会議を経て11月10日に設立総会を開催致しました。当時佐賀県立伊万里高等学校校長をなされた故吉永源三郎先生が伊万里ライオンズクラブに入会されたことをきっかけに「カブトガニの保護活動」の気運が高まり、ロータリークラブや青年会議所への呼びかけを行い195名の会員でスタート致しました。

翌昭和55年より毎年行っている繁殖地の「多々良海岸」の清掃活動をはじめ昭和60年から一般市民の方のもっとカブトガニを知ってもらうために「カブトガニの産卵を観る会」を伊万里市教育委員会の共催を得て開催しております。

翌年には多々良海岸一帯が「伊万里市天然記念物カブトガニ繁殖地」に指定される等、会の取組みが徐々に認知されるようになりました。

また、「日本カブトガニを守る会」の参加団体として全国大会を当地で開催し文部省に「カブトガニ産卵地保護指定地区」を申請致しました。

平成4年にはソプロチミスト伊万里が入会される等、保護活動に弾み付き、伊万里高校「理化・生物部」や地元の「牧島のカブトガニとホタルを育てる会」と共に行った活動がここに実を結んだものと思います。

これまでの37年の継続した取組みの結果平成27年には念願の「国



▲多々良海岸の清掃活動（毎年6月下旬に開催、2tトラック×2台分以上のゴミを搬出）

の天然記念物」に指定されました。これも偏に佐賀県、伊万里市の助成とご支援を頂きながら、歴代会長をはじめ沢山の方々のご尽力のお蔭と感謝致しております。

今回の社会貢献支援財団様からの受賞を契機になお一層、保護活動に邁進して行く所存で御座います。
伊万里市カプトガニを守る会 事務局（伊万里ライオンズクラブ会長） 原田 好和

牧島のカプトガニとホタルを育てる会

この度は、名誉ある社会貢献者表彰をいただき心よりお礼申し上げます。

私達の「牧島のカプトガニとホタルを育てる会」は、平成18年3月、地域内の老若男女245名が会員となって設立致しました。平成21年からは牧島町のまちづくり事業として、町民全員が会員となり保護活動に取り組んでおります。

主な活動内容をご紹介します。

- 海岸の清掃

カプトガニの産卵地である多々良海岸への浮遊物の撤去と清掃作業を産卵期の7月～8月に3～5回実施している。

- 堤防の草刈作業

産卵地を中心に3.6kmに及ぶ海岸堤防の草刈作業を春、夏、秋の3回実施している。

- 河川と干潟の浄化

上流河川の浄化作戦（EM菌を粘土に混ぜ泥団子をつくり撒く）。

海岸干潟のヘドロ浄化実験（フルボ酸鉄によるヘドロの分解）

- 出前講座

地元小学校へ年1回「カプトガニとホタルの出前講座」を開き、地域が誇れる「環境測定のパロメーターと云えるカプトガニとホタルを護り、育てる」ことの大切さと、生態について勉強します。

- 産卵を観る夕べの会

カプトガニの産卵の最盛期の夕べに、竹灯籠を灯し（和紙に絵を書き竹灯籠に巻く）各種イベントを行い産卵に来るカプトガニの番（つがい）を暖かく迎えて産卵の無事を祈ります。

- 伊万里湾カプトガニの館

平成21年に全国初めて民設・民営の「カプトガニの生態展示資料館」をオープンしました。今では全国各地からの参観者を迎える事が出来ています。

今回授賞出来たのは、先輩諸氏、会員の皆さん方の協力のおかげと感謝申し上げます。これを期に私たちは、希少価値の高い「カプトガニとホタル」を護り、育てる活動を通じて「生き物と環境」「生物生存の原理」を認識し、広く内外に啓蒙し、保護への理解を深め、恵まれた自然環境を後世に繋げる責任と使命があることを考え、今後も地域と一体となって活動を継続して参りたいと考えております。

牧島のカプトガニとホタルを育てる会 会長 堀 實



▲伊万里湾カプトガニの館

佐賀県立伊万里高等学校 理化・生物部

伊万里高校 理化・生物部は、昭和37年（1962年）から55年間、絶滅危惧種1種に選定されているカプトガニを保護するために行政・地域と協働して、調査・研究・保護活動を行っています。

その研究に関しては、数多くの受賞歴があります。（野生生物保護功労者「文部大臣奨励賞」、西日本新聞社主催「西日本文化賞」、時事通信社「教育奨励賞」、「環境省自然環境局長賞」等）

また、平成27年（2015年）には、長年、保護活動を進めていた繁殖地が「伊万里湾カプトガニ繁殖地」として国の天然記念物に指定されました。

今回、伊万里市教育委員会からの推薦を受けて、第49回社会貢献者表彰受賞及び表彰式典に出席させていただき、ありがとうございました。社会貢献といってもいろいろな分野の社会貢献があり、こんなに大勢の方たちが人知れず長年にわたって活動を継続されているということに感銘を受けました。

伊万里高校理化・生物は、脈々と続いているカプトガニの調査・研究・保護活動を絶やすことなく続けていく所存です。どうぞよろしく申し上げます。

佐賀県立伊万里高等学校 校長 犬塚 加代子



▲カプトガニの産卵を観る会

大辺路刈り開き隊



和歌山県

和歌山県南部の熊野古道大辺路は2004年7月に富田坂、仏坂、長井坂が世界遺産に登録されたものの、ルートが未確定、古道の未整備が多く大辺路全ルートを通して歩くことができなかった。そこで2004年から古道探査を開始し、古地図や年長者の協力で古道ルートの確定、藪に覆われた古道を地元の人々の協力を得て刈り開き、不法投棄されたゴミの回収等を続けた結果、2016年10月24日に刈り開いた古道が世界遺産追加登録される成果を果たした。

(推薦者：新宮山彦ぐるーぷ)

代表
上野 一夫

第49回社会貢献支援財団の表彰式典に参加させていただき、本当にありがとうございました。

どのような処で、どのような事が始まるのか、全く想像できないまでの受賞者懇談会、表彰式典、祝賀会はすばらしく、夢のような出来事でした。

安倍昭恵会長から表彰状を授与され記念撮影できたこと、郷土の地方新聞2社に取りあげられ、知り合いの方々からお祝いのメッセージを沢山いただきました。さらに串本町公報の取材を受け、新年号に記事が掲載される予定です。

表彰されました各団体、個人様のプロフィールを知り、その素晴らしさに頭が下がると共に、私たちの活動がこのような賞に値するのか、と考えてしまいました。

内館牧子さんの素晴らしいスピーチに、張り詰めていた心と体が解放され、とても楽しくなりました。新年会は近くのホテルで、社会貢献支援財団受賞記念ランチパーティーを催すことにしました。会計者は「受賞記念はランチで行こう、費用が安くつく」この一言で決定しました。最年長の90歳の方をはじめ、仕事の都合で参加できなくなった元メンバー、地域の区長さんなど刈り開きを共にやってきた皆さんを招待して、みんなで受賞を祝い、今までの苦楽を語りたと思っています。

刈り開いてきた熊野古道大辺路と古鷹街道に道標設置、増えつつある外国人の為の英語版絵地図制作、地主の都合によって利用しにくくなった世界遺産古道の迂回路造り、これからも続く活動は今まで通り変わらず楽しんでやっていきます。

受賞者懇談会、祝賀会で隣席した方々との交流を演出してくれました貴財団に感謝するとともに、今後ますますの発展をお祈りいたします。

代表 上野 一夫



▲2014年11月30日 新田平見倒木除去作業



▲2014年6月1日 田の崎自然観察会



▲2016年4月9日 清水峠清掃



▲2009年6月27日 草刈り作業



▲2005年12月11日 大辺路ウォーク



▲2012年11月25日 飛渡谷不法投棄ごみ撤去

コーラル・ネットワーク



神奈川県

世界中で行われている科学者・地域住民・レジャーダイバーによるサンゴ礁モニタリング（観察・監視）「リーフチェック」を日本国内で普及・推進するため、1998年に設立されたネットワーク。リーフチェックの結果は公開され共有されている。活動を普及するため、勉強会やワークショップ、サンゴ礁モニタリングリーダー養成講座の開催を行っている。事務局長の宮本育昌さんは国際会議等に参加し、日本国内のサンゴ礁保全の取り組みを紹介する提言活動も行っている。

（推薦者：NPO 法人 黒潮実感センター）

事務局長

宮本 育昌

この度の社会貢献者表彰の受賞を大変光栄に感じております。

当会はスキューバダイビングを楽しむダイバーが中心となり1998年に設立した組織です。1997年の第1回国際サンゴ礁年を契機に始まったサンゴ礁の健康診断「リーフチェック」を推進・実践すると共に、サンゴ礁・サンゴ群集の保全に向けた都市部での啓発活動を行っています。

サンゴ礁・サンゴ群集の保全を進める上で必要なことの一つに、「現状を明らかにする」ことが挙げられます。ところが、サンゴ礁・サンゴ群集の研究者の人数、そして調査が行われている場所が限られていたため、状況が把握できているサンゴ礁・サンゴ群集は世界の一部だけでした。研究者による詳しい調査はもちろん大事ですが、サンゴ礁・サンゴ群集を保全するにはそれだけでは十分ではありません。世界的な危機にあるサンゴ礁・サンゴ群集が全体として「どうなっているか」分からなければ、「どう守れば良いか」は分からないのです。このことに危機感を覚えたサンゴ礁学者達が集まり、科学的かつ簡便な方法として考案されたのが「リーフチェック」です。「リーフチェック」は、ボランティアでも理解・実施できる方法を採用することで、より多くのサンゴ礁・サンゴ群集の調査を可能にしました。

当会は、1998年の発足以来、日本において「リーフチェック」の拡大に取り組んできました。サンゴ礁・サンゴ群集の健康状態について懸念する各地のダイビングサービスやNPOに対し、当会からメンバーを現地に派遣して調査の方法を指導すると共に、調査の正確性を担保する科学者の紹介やリーフチェックチームの運営支援を行っています。また、サンゴ礁・サンゴ群集の保全に興味を持つダイバーを対象としたサンゴ礁モニタリングリーダー養成講座を開催し、調査方法だけでなくサンゴ礁生態系についての知識を提供しています。

さらに、より多くの方にサンゴ礁・サンゴ群集保全に取り組んでいただけるよう、都市部での啓発活動を行っています。その一つがサンゴの骨格の模様を布用クレヨンで写し取る「サンゴ骨格染めワークショップ」です。これは、オリジナルのハンカチやTシャツを作り、普段の生活の中で使っていただくことで、美しいサンゴ礁を思い出し、保全に取り組んでいただくきっかけとしたい、という想いで考案したものです。

折しも2018年は第3回国際サンゴ礁年であり、サンゴ礁保全に向けた取り組みが世界中で行われます。当会も今回の受賞を梃子として、さらに活動の拡大を図っていく所存です。

事務局長 宮本 育昌



▲リーフチェックの様子



▲リーフチェック渡嘉敷の結果報告会参加証



▲リーフチェック渡嘉敷の事前勉強会の様子



▲リーフチェック渡嘉敷の調査開始前の集合写真



▲サンゴ骨格染めワークショップの様子